

32 『トンガリぼうしの魔法つかい⑤』／パパとアキオの時間旅行』成井豊

○ジャンル／ファミリー・オペレッタ
○ストーリー／ケーキ屋のプリンさんは、実は魔法つかい。ある日、近所に住むトンダは、かせが、タイムマシンのロボット・トキジロウを發明した。プリンさんとトンダはかせは、少年サッカーの試合を見に行く。キーパーのアキオは、試合中に勝手なプレイをして、ミウラ監督に怒られる。アキオはパパとママに「チームをやめる」と言う。パパは「男らしくない」とアキオを叱る。アキオは「パパが子供の頃、男らしかったか、確かめてくる」と言うて、トキジロウともに30年前の世界に向かう……。

○出演者／男8＋女3＋2 計11＋2
○上演時間／90分

登場人物

ケーキ屋プリンさん

パパ

ママ／ババロアさん

おじいちゃん／冬吉（30年前のおじいちゃん）

アキオ（小学6年）

春太郎（小学6年）

和也（小学6年）

夏子（小学6年）

春太郎の同級生たち

ミウラ監督／タケダ先生

トンダはかせ

虫メガネ探偵団たち
タイムマシンのトキジロウ
ロボットたち／星たち／子供たち／チアガールたち

遠くから、教会の鐘の音が聞こえてくる。あたりは次第に暗くなっていき、やがて夜の闇に閉ざされる。月が昇る。ヨーグルト・キャンディーのように、白くて大きな満月。その光に照らされて、六つの白い影が現れる。白いマントに白いトンガリぼうし。トンガリぼうしの魔法つかいたちである。

———
M 1 「トンガリぼうしの魔法つかい」

魔法つかいたち

白い月が昇ったら

窓を開けて 夜空を見上げて

ほら トンガリぼうしが通り過ぎる

悲しい寝顔の女の子には

そっと笑顔の魔法をかける

私は月の魔法つかい

トンガリぼうしの魔法つかい

魔法つかいの一人が、トンガリぼうしをとって、お辞儀をする。この物語の主人公、プリンさんである。

プリンさん

みなさん、こんにちわ。私はトンガリぼうしの魔法つかい。子供たちには、プリンさんと呼ばれてます。みなさんはプリンが好きですか？私には大好き。もちろん食べるのも好きだけど、自分で作って、誰かに食べてもらう方がもっと好き。だから私は、昼間はケーキ屋さんをやっているんです。でも、夜になって月が昇ると、このぼうしをかぶって、空へ飛び立ちます。困っている人を助けるために。私の魔法で、一人でも多くの人が幸せになってくれたら、私は幸せ。月は、真っ暗な夜を少しでも明るくしようと、地上に光を注いでいます。私も月のように、困っている人を明るくしたいんです。

魔法つかいたち

青い屋根を飛び越えて
忘れた夢 届けに行こう
さあ トンガリぼうしが舞い降りる
ひとりぼっちの男の子には
楽しいお話 聞かせてあげる
私は月の魔法つかい
トンガリぼうしの魔法つかい

魔法つかいたちが去る。反対側から、アキオが走ってくる。サッカーのユニフォームを着ている。

プリンさん
アキオ

あら、アキオくん、どこへ行くの？
見てわからないの？ サッカーの試合だよ。今日から、地区大会が始まる。

プリンさん
アキオ

プリンさん
アキオ

プリンさん
アキオ
プリンさん
アキオ

アキオが走り去る。

プリンさん

るんだ。

じゃ、今日は一回戦でわけね。どう？ 勝てそう？

勝つに決まってるよ。ウチのチームは強いんだ。何しろ、キーパーがうまいからね。

うまいって、どれぐらい？

どんなに強いシュートが来ても、体ごとぶつかっていくんだ。あんなに勇気があるヤツ、見たことないよ。

へえ、すごいわね。で、そのキーパーをやってる子って、なんて名前？
アキオ。

え？ それじゃ……。

そうだよ、この僕だよ。僕の活躍が見たかったら、北沢公園のグラウンドへ来てよ。いけね。早く行かないと、遅刻しちゃう。じゃあね、プリンさん。

アキオくんたら、すごい自信ね。自分のこと、うまいとか、勇気があるとか言っちゃって。あんまり調子に乗りすぎて、失敗しなければいいけど。みなさんはサッカーって知ってますか？ 見たことある人、手を挙げて（と手を挙げる）。じゃ、やったことある人、手を挙げて（と手を挙げる）。どうもありがとう（と手を下ろす）。へえ、やっぱりサッカーって人気があるのね。私も、テレビで何回か見たことあるわ。でも、試合に行ったことは一度もない。確か、北沢公園のグラウンドって言って

たわね。よし、私も今から行ってみよう。アキオくんのチームを応援するのよ。さあ、レッツ・ゴー！

プリンさんが走り出す。が、すぐに立ち止まる。

プリンさん

その前に、家へ帰ってお弁当を作ってください。一生懸命応援したら、おなか为空くもんね。

反対側へ、プリンさんが走り去る。

――― M 2 「ロボットの誕生」(演奏のみ)

一台のロボットが、目を閉じて、床に座っている。そこへ、たくさんのロボットがやってくる。座っているロボットの周りを、激しく動き回る。そこへ、トンダはかせがやってくる。手にはホースを持っている。座っているロボットに歩み寄り、その背中にホースをつなぐ。トンダはかせが右手を振り上げる。すると、座っているロボットの体が光る。座っているロボットが目を開ける。そして、ゆっくりと立ち上がる。ロボットの誕生だ。ロボットが動き回る。他のロボットも動き回る。やがて、ロボットたちが去る。後を追って、トンダはかせも去る。

反対側から、プリンさんがやってくる。手にはホーキとランチボックスも持っている。

プリンさん

ああ、もう1時間も経っちゃった。早く行かないと、試合が終わっちゃやう。こうなったら、ホーキに乗っていこうかな。誰も見てないわよね？
(と周囲を見回して) よーし。(とホーキにまたがる)

そこへ、おじいちゃんがやってくる。鼻の下と顎に白髭を生やし、羽織袴を着ている。頭には帽子をかぶり、手にはステッキを持っている。が、背筋はピンと伸びていて、非常に元気がいい。笠智衆さんみたいな感じ。

おじいちゃん

プリンさん

おじいちゃん

プリンさん

おじいちゃん

やあやあ、プリンさん、こんにちわ。

(ホーキにまたがったまま) あ、アキオくんのおじいちゃん……。

そんな恰好で何をしておるんですか？

これは、つまり……。

わかった。新しい掃き方を研究しておるんですな？　しかし、その掃き

方では、あんまりキレイになりませんぞ。ホーキはやっぱり、普通に持

った方がいい。では。(と歩き出す)

あの、どこかへお出かけですか？

(立ち止まって) 北沢公園のグラウンドへ。孫のアキオがショツカーの試

合をやっておるんです。

ショツカーじゃなくて、サッカーですよ。

そう、そのショツカーです。ワシも一つ、応援してやろうかと思いまし

てな。

やっぱりそうですか。実は、私もこれから行くところなんです。よかつ

たら、乗っていきませんか？

乗るって、何に？

このホーキに。

プリンさん、ホーキは地面を掃くものであって、人が乗るものではあり

ませんぞ。

そこへ、トンダはかせと虫メガネ探偵団がやってくる。

トンダはかせ
プリンさん
虫メガネ探偵団
トンダはかせ

おじいちゃん
トンダはかせ
おじいちゃん
プリンさん
おじいちゃん

トンダはかせ
おじいちゃん
トンダはかせ
おじいちゃん

プリンさん
おじいちゃん
トンダはかせ
おじいちゃん

プリンさん！
あら、トンダはかせ。虫メガネ探偵団のみんなも。こんにちわ。

こんちにちわ。
挨拶なんかしてる場合じゃない。プリンさん、聞いてください。私ほとんどでもないロボットを作ってしまった。はつきり言って、ノーベル賞ものの大発明です。

何がノーベル賞だ。この大嘘つきが。

あ、おまえはフユキチ！

おまえなんぞに呼び捨てにされる覚えはないわ、ハネサク！

あら、二人はお友達だったんですか？

こいつが私の友達ですと？ 冗談はやめてください。こいつは子供の頃から、嘘ばかりついておるんです。

いい加減なことを言うな。私は嘘をついたことなんか、一度もないぞ。

ならば、小学六年の時に作った空飛ぶ機械、あれはどうだ。

あれなら、ちゃんと空を飛んだじゃないか。

おまえはあの時、何と言った。この機械に乗れば、どこでも好きな所へ行けると言ったな？ ワシはその言葉をすっかり信じてしまった。そして、あの機械に乗って、屋根の上から飛び降りたんだ。

それで、どうなったんですか？

頭から落ちた。その時できたのが、このハゲだ。(と帽子を取る)

しかし、全然飛ばなかったわけじゃないぞ。少なくとも、1メートルは

飛んでいた。

何が1メートルだ。また嘘をついて。

トンダはかせ
おじいちゃん
プリンさん

トンダはかせ

おじいちゃん
トンダはかせ
プリンさん
トンダはかせ

プリンさん
トンダはかせ

トキジロウがやってくる。いわゆる箱型のロボットでなく、ヒューマノイド・タイプ。山高帽をかぶって、燕尾服を着ている。首から、大きな時計を下げている。『不思議の国のアリス』のウサギみたいな感じ。

———
M3 「タイムマシンがあれば」

トンダはかせ

嘘じゃない。
いや、おまえは大嘘つきだ。
まあまあ、そんな昔のことで喧嘩しても仕方ないでしょう？ 今から確かめるわけにもいかないんだし。
いや、確かめることはできますよ。私とフユキチが小学生だった頃へ戻ればいいんです。
そんなことができるものか。
できるんだよ、私が作ったロボットに頼めば。
それが、さっき言ってた大発明ですか？
その通り。私が作ったロボットは、時間を逆上ることができません。
つまり、タイムマシンなんです。
タイムマシン？
いでよ、トキジロウ！
時計の針はカチカチカッチン
過去から未来へ進んでいく
過ぎた時間はもう戻らない

虫メガネ探偵団

大人はけっして子供になれない
だけどときどき思い出すのさ
校庭の空 真っ赤な夕焼け
ああ タイムマシンがあれば
もう一度 あの日に帰ることができる
君に言えなかった言葉
今度こそ 言ってみせるさ きつと

プリンさん

みんな

運動会はコチコチコッチン
緊張しちゃった最後のリレー
バトンを受け取り走っていくと
君の背中が遠くに見えた
だけど いきなり足がもつれて
転んでバトンが渡せなかった
ああ タイムマシンがあれば
もう一度 あの日に帰ることができる
君に言えなかったゴメン
今度こそ 言ってみせるさ きつと

トンダはかせ
トキジロウ
おじいちゃん
プリンさん

ご紹介しましょう。タイムマシンのトキジロウです。
(お辞儀をする)
バカバカしい。何がタイムマシンだ。
タイムマシンじゃなくて、タイムマシンですよ。

おじいちゃん

とにかく、ワシは忙しいんだ。早く行かんと、シヨツカーの試合が終わってしまふ。

プリンさん

シヨツカーじゃなくて、サッカーですよ。

おじいちゃん

いちいち言わんでも、わかっておる。さらばだ、ハネサク！

トンダはかせ

待て、フユキチ！

おじいちゃんが去る。

トンダはかせ

全く頑固なヤツだ。(プリンさんに) あいつは子供の頃から、人の言うことを全然聞かないんです。

プリンさん

それはお互い様でしょう？ いけない。私も早く行かないと。

トンダはかせ

プリンさんも、サッカーの試合ですか？

プリンさん

ええ。よかったら、トンダはかせも行きませんか？

トンダはかせ

トキジロウ、時間旅行はまた今度にするか。

トキジロウ

(うなづく)

プリンさん

じゃ、みんな、手をつないで。時間旅行のかわりに、空の旅をしましよ

う。さあ、レッツ・ゴー！

プリンさん・トンダはかせ・虫メガネ探偵団・トキジロウが走り去る。

サッカーのユニフォームを着た選手たちがやってくる。みんなが同じ方向を向いて立つ。一番後ろが、キーパーのアキオ。つまり、アキオの後ろにゴールがあるのだ。そこへ、ミウラ監督がやってくる。サッカーのユニフォームの上にジャンパーを着て、頭に帽子をかぶっている。

ミウラ監督

みんな、走れ！ 最後の笛が鳴るまで、走り続けるんだ！

そして、試合が始まる。敵のチームは見えない。ボールも見えない。

————— M 4 「サッカーボールと僕らの夢①」

ミウラ監督

真夏の太陽よりも熱い
カッカと燃える体は熱い

僕らがボールを追いかけるのは

そうだ この熱さが好きだからだ

走って走って走って走って

それでも走って 追いかけるんだ

サッカーボールと僕らの夢を

選手たち

アキオが前に出る。

ミウラ監督　　キーパー、何をやってるんだ！　元の位置へ戻れ！

アキオが元の位置に戻る。そこへ、パパとママがやってくる。ミウラ監督の横に並ぶ。

ママ　　ちよつと、監督さん。ウチのアキオが何かしましたか？

ミウラ監督　　キーパーのくせに、ゴールから離れたんです。

ママ　　いいじゃないですか、少しぐらい。どうせ、こっちが勝ってるんだから。
パパ　　まあまあ。文句を言っていないで、アキオを応援しようじゃないか。

パパ・ママ

真冬の北風より冷たい
敵のシュートが決まった瞬間

だけど　その場で立ち止まったら

ダメだ　諦めるな　最後の瞬間まで

みんな　走って走って走って走って

それでも走って　追いかけるんだ

サッカーボールと僕らの夢を

アキオが前に出る。

ミウラ監督　　キーパー、元の位置に戻れ！　早く！

試合終了を告げるホイッスルの音。選手たちが横一列に並んで礼をする。そこへ、ミウラ監督が歩み寄る。

ミウラ監督

選手たち

ミウラ監督

よし、みんなよく頑張った。5対0で、ウチのチームの勝ちだ。
お疲れ様でした。(と地面に座る)

今日の相手は、はつきり言って弱かった。しかし、みんな油断しないで、全力を出した。と言いたいところだが、この中に一人だけ、全力を出さなかった者がいる。誰だかわかるか？(と選手たちを見回して)わからないなら、教えてやろう。アキオ、立て。

アキオ

ミウラ監督

アキオ

ミウラ監督

アキオ

ミウラ監督

(立ち上がる)
おまえはキーパーのくせに、何度も前に行こうとしたな？ なぜだ。僕も攻撃に参加しようと思っただけです。

キーパーの仕事はなんだ。ゴールを守ることじゃないのか？

でも、相手は全然シュートしてこなかったから。

しかし、何度もゴールの近くまで来た。おまえはそのたびに、急いでゴールに戻った。そんなことをするぐらいなら、なぜずっとゴールにいな

かった。

それは……。

アキオ

ミウラ監督

それは、おまえもシュートしたかったからだ。相手のチームが弱いからって、なめてかかってたんだ。

アキオ

ミウラ監督

違います。僕は少しでもチームの役に立ちたかったです。チームの役に立ちたかったら、前に行こうとはしなかったはずだ。アキ

アキオ

ミウラ 監督

ママ

オ、おまえは次の試合には出なくていい。
え？
自分のことしか考えられない人間に、試合に出る資格はない。
ちよっと、監督さん。今、なんて言ったんですか？

ママがミウラ監督に歩み寄る。後を追って、パパも歩み寄る。

パパ

ママ

ママ、やめなさい。
いいえ、やめません。ウチのアキオを試合に出さないなんて、とんでもない話だわ。今、言ったことを取り消してください。

ミウラ 監督

ママ

ミウラ 監督

お断りします。
出してくれたら、お寿司をご馳走すると言ってても？
お断りします。私の本職は寿司屋ですから。（選手たちに）今日はこれで

選手たち

解散だ。お疲れ様。
お疲れ様でした。

ミウラ監督と選手たちが去る。パパ・ママ・アキオが残る。

ママ

パパ

何よ、イバっちゃって。寿司屋なんか、アキオの実力がわかるもんで
すか。

ママ

ママ

しかし、監督の言うことにも一理ある。今日のアキオは、ちよっと自分
勝手だったかもしれない。
何言ってるのよ。アキオはチームのために頑張ったじゃない。相手の攻

アキオ ママ パパ
ママ ママ ママ
アキオ パパ ママ
ママ ママ ママ
アキオ ママ ママ
ママ ママ ママ

撃を0点に抑えたのは、アキオなのよ。
しかし、相手は一回もシュートしてないぞ。
それは、シュートしても、アキオに取られると思ったからよ。
そうじゃない。シュートする前に、ディフェンダーがクリアしたからだ。
難しいこと言わないで。私は英語が苦手なのよ。とにかく、アキオは何
も悪いことをしてないわ。それなのに、試合に出さないなんて、パパは
許しても、この私が許しません。さあ、アキオ。もう一度、監督さんに
抗議してきましょう。
いいよ。
どうして。あなた、試合に出たくないの？
出たくない。僕、チームをやめる。
今、なんて言った。
チームをやめると言ったんだ。試合に出られないなら、いてもしょう
がないし。(と泣き出す)
何よ、アキオ。あなた、泣いてるの？(とアキオに歩み寄る)
バカ!

アキオ

パパ

おじいちゃん

パパ

もうイヤになったんだよ。毎日毎日、怒られるのが。僕はサッカーをするために、チームに入ったんだ。怒られるためじゃない。

バカ！

年寄りに向かって、バカとはなんだ。

いいからお父さんは黙っててください。アキオ、おまえはそれでも男か。怒られるのがイヤだからやめるなんて、情けないとは思わないのか。私がアキオだったら、絶対にやめないぞ。一度やるって決めたら、最後まで諦めない。それが男というものさ。

M 5 「男なら」

パパ

男なら 胸にでっかい鉄の塊
抱えて生きているものさ

人からなんと言われようとも

鉄はけっして砕けないのさ

男と生まれたその日から

男は前に進むだけ

苦しくたつて歯を食いしばれ

男なら

みんな

おじいちゃん

男なら 胸にぼっかり青い湖

抱えて生きているものさ

何度も人に騙されたって

澄んだ心で信じるだけさ

みんな

男と生まれたその日から
男の傷は増えていく
悲しくたつて唇を噛め 男なら

パパ どうだ、アキオ。男とはどういうものか、わかったか？

ママ 私には全然わかりません。

パパ それは、ママが女だから。

おじいちゃん いや、この人はワシより男らしいぞ。

ママ 男らしいとか、らしくないとか、そんなのどっちでもいいじゃない。それより、アキオはまだ子供なのよ。パパは大人だから、苦しくても我慢

パパ できるだろうけど、アキオには無理よ。

アキオ 大人だろうが、子供だろうが、男であることに変わりはない。

アキオ じゃ、パパは子供の頃から男らしかった？

パパ もちろんだ。

アキオ 一度やるって決めたら、けっして諦めなかった？

パパ もちろんだとも。私はおまえみたいな弱虫じゃなかった。人前で泣いた

アキオ ことなんか、一度もなかった。

アキオ 嘘だ。パパは嘘つきだ。

アキオ 親に向かつて、嘘つきとはなんだ。私は怒ったぞ。チームをやめるなら、

アキオ 家には帰ってくるな。帰ってきてても、中には入れてやらないからな。

そこへ、プリンさん・トンダはかせ・虫メガネ探偵団がやってくる。

プリンさん
おじいちゃん
プリンさん

トシダはかせ
おじいちゃん
トシダはかせ
アキオ
トシダはかせ

おじいちゃん
トシダはかせ

プリンさん
トシダはかせ

プリンさん
トシダはかせ
プリンさん
トシダはかせ

ママ

おじいちゃん！
ああ、プリンさん。ずいぶん遅かったですな。
トシダはかせが途中で落ちたんです。落ちた所が湖だったから、怪我は
なかったけど。

しかし、服はビショビショだ。(と白衣の裾を絞る)

おまえなんか何しに来た。ワシを追いかけたのか。

誰がおまえなんか追いかけるもんか。私はアキオくんに会いに来たんだ。
僕に？

そうだ。君は監督に「次の試合には出さない」と言われたそうだな。い
や、話は空から聞かせてもらったよ。

盗み聞きをしておったのか、この泥棒猫。

おまえの声はデカいんだ。だから、聞きたくなくても聞こえたんだよ、
このヒゲナマズ。

まあまあ、二人とも喧嘩しないで。

(アキオに) 監督がそんなことを言ったのは、君が自分勝手なプレイを
したからだ。ということは、君が自分勝手なプレイをしなかったら、次
の試合には出られるということになる。

でも、今さら試合をやり直すわけにもいかないし。
それがやり直せるんだよ。トキジロウに頼めば。

そうか。

トキジロウに、2時間前へ連れていってもらうんだ。そして、2時間前
のアキオくんにこう言うんだよ。自分勝手なプレイをするなって。
そんなことが、本当にできるんですか？

パパ

トンダはかせならできらう。何しろ、ロボット工学の世界的権威だからな。

おじいちゃん
トンダはかせ

何が世界的権威だ。ただの大嘘つきのくせに。
私が大嘘つきかどうか、その目で確かめるがいい。いでよ、トキジロウ！

そこへ、トキジロウがやってくる。

トンダはかせ

早速だが、おまえに頼みがある。私とアキオくんを、2時間前まで連れていってくれ。

トキジロウ

(うなづく)

アキオ
このロボットはタイムマシンなの？

トンダはかせ
そうだ。こいつに頼めば、どこでも好きな時代へ連れていってくれる。

アキオ
30年前にも行ける？

トンダはかせ
行けるさ。しかし、これから行くのは2時間前だ。

アキオ
僕は30年前に行きたいんだ。パパは小学生だった頃に。

プリンさん
何のために？

アキオ
パパが本当に男らしかったかどうか、この目で確かめるんだ。

トンダはかせ
こらこら、いきなり何を言い出すんだ。

アキオ
トキジロウ！ 僕を30年前の世界へ連れていってくれ！

トキジロウ
(うなづく)

パパ
待ちなさい、アキオ！

ママ
アキオ！

アキオがトキジロウの右手を引つ張つて、走り出す。
をつかむ。と、閃光が走る。みんなが地面に伏せる。
。パパが追いかけて、トキジロウの左手

みんなが顔を上げる。が、パパ・アキオ・トキジロウの姿はどこにもない。

ママ アキオ！ パパ！ 二人ともどこへ行ったの？

トシダはかせ トキジロウと一緒に、 ∞ 年前の世界へ行っちゃいました。

おじいちゃん 嘘をつくな！

トシダはかせ 嘘だと思うなら、二人を探せばいいだろう。

おじいちゃん よし、ここで待っておれ。すぐに見つけてきてやる。アキオ、どこだ！

隠れてないで、出てこい！

おじいちゃんが去る。

ママ トシダはかせ、アキオとパパは大丈夫でしょうか？

トシダはかせ ご安心ください、ママさん。トキジロウは完璧なロボットです。途中で

故障するなんてことは、絶対にありません。今頃は、無事に ∞ 年前の世界に着いているはずですよ。

ママ よかったあ。

トシダはかせ ただ……。

プリンさん ただ、なんですか？

トシダはかせ 一つだけ問題があるんです。トキジロウは、向こうの世界に1時間しか

ママ
トンダはかせ

ママ

トンダはかせ

プリンさん

トンダはかせ

ママ

虫メガネ探偵団

ママが気絶して地面に倒れる。虫メガネ探偵団がママの介抱をする。

プリンさん
トンダはかせ

プリンさん

トンダはかせ

プリンさん

トンダはかせ

プリンさん

いられません。1時間以内に帰ってこないと、エネルギーが切れてしま
うんです。

そんなこと、アキオもパパも知らないわ。

ご安心ください、ママさん。二人は知らなくても、トキジロウが知って
ています。1時間が過ぎる前に、二人に「帰りましょう」と言うはずで
す。

よかったあ。

ただ……。

ただ、なんですか？

アキオくんが、「イヤだ。僕はまだ帰らない」って言ったとしたら。

二人はこっちの世界へ二度と帰ってこないんですね。ウーン。

ママさん！

こうなったら、二人の後を追いかけるしかないみたいですね。
しかし、トキジロウは一台しかない。今から二台目を作っても、最低半
年はかかります。

半年も待つわけにはいかないわ。私がなんとかしましょう。

なんとかするって？

月の光に助けてもらうんです。

わかった。また魔法を使うんですね？　しかし、今はまだ昼間です。月
なんか出てませんよ。

プリンさん え？ じゃ、心の中で思い浮かべましょう。そうすれば、きっと大丈夫。

その時、空からトンガリぼうしが飛んでくる。プリンさんがつかみ、頭にかぶる。

————— M 6 「ムーンライト・マジック」

プリンさん

お願い月の光よ 私の声を聞いてよ

道に迷った旅人に 道を教えるその光で

私の悲しみ消して 明日はきつと

いい日が来ると 信じていたから

ルーナルーナルー

遠くに、白くて大きな満月が見える。月の光がプリンさんを包む。

プリンさん

さあ、みんな、手をつないで。

トンダはかせ

また空の旅ですか？ また落ちたら、どうしよう。

プリンさん

いいえ、今度は空の旅じゃありません。本物の時間旅行です。さあ、レッツ・ゴー！

プリンさん・トンダはかせ・虫メガネ探偵団が去る。反対側から、おじいちゃんがやってくる。

おじいちゃん

ダメだ。どうしても見つからなかった。きっと家へ帰って、お雑煮でも

ママ

おじいちゃん

ママ

おじいちゃん

ママ

おじいちゃん

ママとおじいちゃんが去る。

食べておるんだろう。おや？ ハネサクのヤツがないぞ。それに、プリンさんも。いるのは、ワシより男らしい人だけだ。(とママに近寄つて) こら、起きなさい。こんな所で寝ておったら、風邪を引くぞ。

(目を開けて) わあ、ヒゲナマズ！ と思つたら、お父さんですか。あれ？ トンダはかせとプリンさんは？

いなくなつた。きつと家へ帰つて、栗きんとんでも食べておるんだろう。おや？ (とママの足の下から紙を拾い上げて) こんな所に紙が落ちておる。ほら。(とママに差し出す)

(受け取つて) 「ママさんへ。アキオくんとパパさんは必ず私が連れ戻します。だから、安心して待っていてください。プリン」

どうやらみんなは、本当に30年前の世界へ行つてしまつたらしいな。大丈夫かしら、みんな。

なんとかなるだろう。プリンさんに任せておけば。

――― M 7 「流れ星を追いかけて」（演奏のみ）

たくさんの星がやってくる。クルクル回りながら、通り過ぎていく。そこへ、プリンさん・トンダはかせ・虫メガネ探偵団がやってくる。

プリンさん

わあ、きれいな流れ星。

トンダはかせ

いや、あれは流れ星じゃない。30年前にあった場所に向かって、猛スピードで動いてるんです。

プリンさん

どっちへ行けばいいのかしら。

トンダはかせ

あの星の後を追いかけましょう。30年前の世界は、きっとその先にある。

プリンさん

わかりました。みんな、ちゃんと手を握ってる？

虫メガネ探偵団

握ってます。絶対にはずさないよ。放したら、どこの世界へ落ちるか、わからないんだからな。

プリンさん

トンダはかせ、手が放れてますよ！

トンダはかせ

しまった、誰か助けてくれ！

プリンさん

待っててください、トンダはかせ！

トンダはかせが去る。後を追って、プリンさんと虫メガネ探偵団が去る。そして、星たちも去る。反対側から、パパ・アキオ・トキジロウがやってくる。

パパ
アキオ
トキジロウ

ここはどこだ？
トキジロウ、ここは本当に30年前の世界なの？

（うなづく）

トキジロウ、あの建物は、どこかで見たことがあるなあ。

アキオ
汚い建物だな。壁が木でできてるぞ。

パパ
思い出した。あれは、私に通っていた、青山円形小学校だ。

アキオ
僕が通ってるのも、青山円形小学校だよ。でも、あんなに汚くはない。

パパ
私が小学生の頃は、まだ木造の校舎だったんだ。ということは、私たちは、本当に30年前の世界に来てしまったんだ。

アキオ
よし、パパを探しに行くぞ。パパの名前はハルタロウだね？

パパ
ああ、そうだ。

アキオ
ハルタロウ！ ハルタロウ！

パパ
こら、こんな所で大きな声を出すな。授業の邪魔になるじゃないか。

アキオ
あ、誰か出てきた。

パパ
まずい。早く隠れるんだ。

アキオ
どうして？

パパ
私たちは、30年後の世界から来た、未来人なんだ。この世界の人間と、

アキオ
みだりに話をしてはまずい。

トキジロウ
わかった。トキジロウ、おまえも早く隠れて。

（うなづく）

トキジロウ

パパ・アキオ・トキジロウが客席に隠れる。反対側から、タケダ先生と生徒たちがやってくる。みんな、手に竹馬を持っている。

タケダ先生
生徒たち
タケダ先生

さあ、みんな、準備はいいか？ 一人二本ずつ、竹馬を持ってるな？
持ってます。

その竹馬は、みんなが自分の力で作った竹馬だ。テレビのコマーシャルでやっている、「タンタン竹馬カラー竹馬、タンタン竹馬カラー竹馬」なんてヤツと違って、世界にたった一つしかない。だから、大切にするんだぞ。

生徒たち
タケダ先生

わかりました。
じゃ、早速乗ってみることにしよう。落ちても泣くんじゃないぞ。何度も落ちて、乗り方を覚えるんだ。よし、始め！

生徒たちが竹馬に乗る。

—————
M 8 「子供は遊びの天才だ」

タケダ先生

竹を一本持ってきて
ノコギリ使って 四つに切って

生徒たち

紐で結べば ほらできた
カッコいいだろ 僕の竹馬
子供は遊びの天才だ

遊び道具は自分で作る
お金がなくても気にしない
頭を使った子の勝ちなのさ

パパが客席から出てくる。後を追って、アキオとトキジロウも出てくる。

パパ

先生、お久しぶりです。

タケダ先生

えーと、どちら様でしたっけ？

パパ

私のこと、覚えてないんですか？ 私は先生の教え子の――

アキオ

パパ、話をしちやいけないんじゃないのかなかったの？

パパ

しまった！

タケダ先生

私の教え子？

パパ

教え子の、イトコの友達の方に住んでいるお相撲さんのファンです。

タケダ先生

つまり、ただの通りすがりってわけですね？

パパ

そうです。それにしても、竹馬とは懐かしい。私も小学生の頃、よく乗

タケダ先生

ったもんです。

パパ

そうですか。じゃ、あなたも一緒に乗りますか？

パパ

私が乗ったら、竹馬が壊れてしまいます。かわりに、歌を歌わしてください。

パパ

輪ゴムをいっぱい持ってきて

鎖みたいに端から結んで

ピーンと張って さあ飛ばう

みんな

ゴム飛びする者 寄っといで
子供は遊びの天才だ
遊び道具は自分で作る
日が暮れるまで走るのさ
もっと楽しい遊びを探して

その時、生徒の中の一人が、竹馬から落ちる。

タケダ先生

春太郎

タケダ先生

和也

タケダ先生

和也

タケダ先生

和也

タケダ先生

和也

春太郎

タケダ先生

(春太郎に駆け寄って) 大丈夫か？ 怪我はしなかつたろうな？
(うなづく)
一回落ちたからって、気にすることは無い。何回でも挑戦するんだ。
先生、そいつが落ちたのは、一回だけじゃないですよ。
なんだって？
全部で五十回です。俺、教えてました。
しかし、諦めずに頑張れば、いつかは乗れるようになるさ。
俺はそうは思わないな。そいつは何をやってもうまくできないんだ。
そう言えばそうだ。(春太郎に) おまえは跳び箱も跳べないし、逆上が
りもできない。学校の外へマラソンに行くと、一人だけ帰ってこない。
いつも迷子になるんだ。
(春太郎に) そんなヤツが竹馬に乗れるわけないんだよ。さっさと諦め
て、家へ帰れ。
(うつむいて泣き出す)
(和也に) こらこら、同級生をいじめらんじやない。

チャイムの音。

タケダ先生　よし、授業はおしまいだ。掃除当番は、急いで教室に入れ。

タケダ先生が去る。

生徒の中の一人が、春太郎に歩み寄る。

夏子
春太郎

大丈夫？

(うなづく)

一生懸命練習すれば、きっと乗れるようになるよ。じゃあね。

夏子が去る。

和也
春太郎
和也

おまえ、それでも男か。女なんか慰められて、恥ずかしくないのか。
(しやがんで泣き出す)

あ、また泣き出した。こんな弱虫、見たことないぞ。

和也と他の生徒たちが竹馬に乗って、春太郎の周りを回る。

アキオ
パパ
アキオ

わかったよ、パパ。あのいじめっ子がパパなんだね？

いや、それは……。

同級生を泣かして、あんなに喜んでる。パパって、子供の頃から意地悪だったんだね。

パ
パ
アキオ
アキオ
違うんだ、私は……。
もう我慢できない。僕が行って、注意してやる。
待ちなさい、アキオ！

アキオが和也に歩み寄る。

アキオ
和也
アキオ
やめろよ、弱い者いじめは。
（竹馬に乗ったまま）うるさい。関係ないヤツは黙ってる。
やめろって言うてるのが、聞こえないのか？

アキオが和也を押す。和也が倒れる。

和也
アキオ
和也
アキオ
和也
アキオ
和也
生徒たち
和也
アキオ
和也
誰だ、おまえは。
僕の名前はアキオ。おまえはハルタロウだな？
バカ。俺の名前は和也だ。
和也？ それじゃ……。
春太郎は、そこで泣いてる弱虫だよ。
なんだって？
俺に喧嘩を売るなんて、いい度胸をしてるじゃないか。
ダメだよ、和也。こんな所で喧嘩したら、先生に見つかって怒られる。
そうか。じゃ、夕方6時に、もう一度ここへ来い。男と男の決闘だ。
ちよつと待てよ。僕は決闘なんて——
絶対に来いよ。来なかったら、また春太郎を泣かすからな。

和也と他の生徒たちが去る。

アキオ

パパ

アキオ

パパ

パパ、これは一体どういうことなの？
それはつまり、男なら誰でも人に言えない過去があるってことだ。
人前で泣いたことなんか一度ないって、嘘だったんだね？
ごめん、アキオ。私は、本当は学校一の弱虫だったんだ。

――――
M9 「弱虫エレジー」

パパ

パパ・アキオ

バカにするならすればいいのさ
どうせ僕には何もできない
言い返しても喧嘩になるだけ
だったら僕が泣けばいいんだ
だけど本当は大きな声で
叫びたいんだみんなに向かって
僕は弱虫なんかじゃないと

パパ

パパ・アキオ

喧嘩が強いと どうして偉いの
どうして人をぶてるんだろう
僕はぶたれた時の痛さが
よくわかるから我慢するんだ
だけど 本当は大きな声で

叫びたいんだ みんなに向かつて
人をぶつのはいけないことだと

そこへ、30年前のおじいちゃんがやってくる。剣道着を着て、竹刀を持っている。

冬吉 春太郎、おまえ、また泣いておるのか。

アキオ パパ、この人は？

冬吉 30年前のおじいちゃんだ。この頃は、近所の高校で、剣道を教えていたんだ。

冬吉 (春太郎に) いつまで泣いておるんだ。ほら、立て。立たんか。

冬吉 まあまあ、そんなに怒らなくてもいいじゃないですか、お父さん。

冬吉 お父さん？ ワシは君のお父さんではないぞ。

冬吉 すいません、人違いでした。

冬吉 他人が横から口出しせんでくれ。ワシは春太郎に話をしておるんだ。お

冬吉 はい、春太郎。

冬吉 君に言ったのではない。春太郎に言ったんだ。

冬吉 すいません、聞き違いでした。

冬吉 春太郎、おまえはそれでも男か。竹馬に乗れないから泣くなんて、情け

冬吉 ないとは思わないのか。男なら泣くのはやめて、さっさと練習したらど

冬吉 うだ。

冬吉 でも、お父さん……。

冬吉 親に向かつて、口答えをするつもりか。ワシは怒ったぞ。乗れるように

春太郎
冬吉

アキオ

冬吉

アキオ

パパ

アキオ

アキオと春太郎が走り出す。と、トキジロウが行く手に立ちふさがる。

トキジロウ

アキオ

トキジロウ

アキオ

トキジロウ

パパ

アキオ

パパ

アキオ

なるまで、家には帰ってくるな。帰ってきても、中には入れてやらんかな。

黙れ、頑固ジジイ。

頑固ジジイ？ 私は確かに頑固だが、まだジジイではないぞ。

人前で泣くのが、どうして悪いんだよ。こいつだつて、泣きたくて泣いてるわけじゃないんだ。行こう、春太郎。（と春太郎の手をつかむ）

アキオ、どこへ行くんだ。

二人で竹馬の練習をするんだ。（春太郎に）僕が必ず乗れるようにしてやるからな。

行つてはいけません。

どうして。

こつちの世界へ来てから、五分が過ぎました。そろそろ帰らなくてはイヤだ。僕はまだ帰らない。

それはいけません。私のエネルギーは、あと5分でなくなります。なくなつたら、元の世界へは帰れなくなるんです。

それは大変だ。さあ、アキオ。パパと一緒に帰ろう。

僕はまだ帰らない。6時に決闘があるんだ。

決闘なんて行かなくていい。

でも、行かつて約束したんだ。僕が約束を破つたら、また春太郎がいじめられる。そんなの、僕は絶対にイヤだ。行こう、春太郎。

パパ

待ちなさい、アキオ！

春太郎が走り去る。後を追って、パパが走り去る。

冬吉

いや、実に元気のいい子だ。春太郎も、少しはあの子を見習ってほしい

もんだな。

トキジロウ

しかし、私はどうすればいいんでしよう？

冬吉

なんとかなるだろう。あの子に任せておけば。

冬吉が去る。

そこへ、プリンさん・トンダはかせ・虫メガネ探偵団がやってくる。

プリンさん
トンダはかせ

トキジロウ！
見つかってよかった。まだ1時間は過ぎてないぞ。急いで、元の世界へ帰ろう。

プリンさん

でも、アキオくんとパパさんがいません。

トンダはかせ

(周囲を見回して) 本当だ。トキジロウ、二人はどこへ行ったんだ？

トキジロウ

30年前のパパさんと、竹馬の練習に行きました。

トキジロウ

竹馬の練習だと？

トンダはかせ

私は止めたんですが、アキオくんが「イヤだ」と言いました。

プリンさん

やっぱり、私の思った通りだ。プリンさん、どうしましょう？

プリンさん

大丈夫ですよ。月の助けを借りれば、みんなで元の世界へ帰れます。

トンダはかせ

そうか。プリンさんには魔法があるんだ。

プリンさん

でも、その前に、アキオくんとパパさんを探さないと。

トンダはかせ

また魔法でお願いしますよ。

プリンさん

仕方ないなあ。じゃ、今度はトンダはかせが歌ってください。

トンダはかせ

お安いご用です。さあ、行きますよ。

トنداはかせ

お願い月の光よ 私の声を聞いてよ
家をなくした子犬に ほほえみかけるその光で
私の淋しさ消して いつかまた
あの人に会えると 信じていたから
ルーナルーナルー

プリンさん

トنداはかせ

あれ？ 月が出ない。
おかしいなあ。ちゃんと心の中で思い浮かべたのに。（虫メガネ探偵団
に）おまえたちはどうだ？

虫メガネ探偵団

プリンさん

トنداはかせ

僕たちだって、思い浮かべましたよ。
私も思い浮かべた。じゃ、どうして月が出ないの？
わかった。ここが100年前の世界だからだ。

プリンさん

トنداはかせ

どういうことですか？
いいですか、プリンさん。私たちは100年後の世界の人間です。本当は、
この世界にはいけない人間なんだ。だから、ここにいるためには、

プリンさん

トنداはかせ

非常に大きなエネルギーがかかる。
だから、トキジロウは、1時間でエネルギーがなくなるんですね？

プリンさん

トنداはかせ

その通り。私たち人間も同じです。この世界に1日いると、1年分、年
を取る。

プリンさん

トنداはかせ

そんなのイヤだ。
イヤでも仕方ない。この世界にいる限り、365倍のエネルギーが必要

プリンさん
トンドはかせ

なんです。
ということは、魔法を使う時も？

365倍のエネルギーが必要ですよ。いくらプリンさんでも、そんなに大きなエネルギーは出せない。つまり、この世界では、プリンさんは魔法が使えないんです。

プリンさん

そんなあ。

トキジロウ

トンドはかせ。

トンドはかせ

どうした、トキジロウ。

トキジロウ

1 持間が過ぎました。私はもう動けません。

虫メガネ探偵団

トキジロウ！

トキジロウが気絶して地面に倒れる。虫メガネ探偵団がトキジロウの介抱をする。

プリンさん

トンドはかせ、トキジロウは死んだんですか？

トンドはかせ

ロボットは死にません。エネルギーを補給すれば、また動き出します。

プリンさん

じゃ、すぐにエネルギーを補給しましょう。

トンドはかせ

それが、ここにはないんです。

プリンさん

ないなら、作ればいいでしょう？

トンドはかせ

30年後の世界なら、すぐに作れます。が、ここでは不可能だ。

プリンさん

私は魔法が使えないし、トキジロウも動かない。私たちは、元の世界へ

トンドはかせ

は帰れないんですか？ この世界で生きるしかないんですか？

プリンさん

いや、生きることもできません。
どうして？

トンダはかせ

プリンさん

トンダはかせ

プリンさん

トンダはかせ

プリンさん

トンダはかせ

プリンさん

私たちは、1日で1歳、年を取る。1カ月で30歳です。2カ月過ぎた頃

には、プリンさんも私も死んでいるでしょう。

そんな。あと2カ月で死ぬなんて。

トキジロウのエネルギーさえあれば、元の世界へ戻れるんですが。

私に任せてください。

エネルギーを手に入れる方法があるんですか？

一つだけあるんです。ほしいものを手に入れる方法が。さあ、みんな。

私について来て。

一体どこへ行くんですか？

いいから、黙ってついてきて。急がないと、どんどん年を取っちゃうん

だから。

トンダはかせがトキジロウを背負う。プリンさん・トンダはかせ・虫メガネ探偵団・ト
キジロウが走り去る。

———
M「原っぱで遊ぼうよ」（演奏のみ）

たくさんの子供がやってくる。鬼ごっこやかくれんぼや影踏みをして、楽しく遊び回
やがて、遠くからカラスの鳴き声。立ち止まって見上げると、空は夕焼け。顔を見合せ、
大きく手を振り、自分の家へ帰っていく。
そこへ、アキオと春太郎がやってくる。後を追って、パパがやってくる。

パパ 待ってくれよ、アキオ。パパはもう走れないよ。

アキオ よし、ここで練習しよう。

春太郎 （うなづく）

パパ おや、あの柿の木は、どこかで見たことがあるなあ。

アキオ 前にもここへ来たんじゃない？

パパ 思い出した。ここは、私が小学生の時に遊んだ、原っぱだ。

アキオ はらっぱ？

パパ なんだ、アキオは原っぱも知らないのか？

アキオ 野原のこと？

パパ 似てるけど、違うな。野原みたいに、草が生え放題になってる空き地の
ことさ。昔は町のあちこちに、こんな原っぱがあったんだ。

アキオ
パパ

アキオ

パパ

春太郎

アキオ
パパ

アキオ
パパ

アキオ

アキオ

アキオ
パパ

アキオ
パパ

こんな所で、何をして遊ぶの？

いろいろなやつたぞ。鬼ごっこか、かくれんぼとか、影踏みとか。学校が終わると、家に帰ってランドセルを置いて、すぐに原っぱへ行っただ。原っぱへ行けば、みんながいる。みんながいれば、いろんな遊びができる。私は原っぱが大好きだったんだ。

でも、パパは弱虫だったんでしよう？ みんなにいじめられて、泣かさ

れてたんじゃないの？
それでも、パパは原っぱへ行った。何回泣かされても、パパはやっぱり

みんなと遊びたかったんだ。そうだろう、春太郎？
(うなづく)
よし、私も練習を手伝おう。

パパも？
私は竹馬に乗れなかった。だから、みんなにいじめられて、泣かされた。

しかし、この春太郎には、乗れるようになってほしいんだ。
よかった。じゃ、僕にも乗り方を教えてよ。

え？
僕は竹馬なんて乗ったことないんだ。だから、どうやって春太郎に教え

ればいいのか、わからないんだ。
ちよつと待て。私だって、わからないぞ。

え？
私はてつきり、アキオが乗れるものだと思ってたんだ。だから、アキオ

の助手をするつもりだったのに。

そこへ、冬吉がやってくる。竹馬に乗っている。

冬吉

いやあ、竹馬は楽しいなあ。
お父さん。

冬吉

ワシは君のお父さんじゃない。何度言えばわかるんだ。

冬吉

こんな所へ何しに来たんですか？

冬吉

いや、ワシは竹馬に乗るのが大好きでね。毎日この時間になると、近所を竹馬でマラソンすることにしておるんだ。

冬吉

本当ですか？ 私たちの後を追いかけてきたんじゃないんですか？

冬吉

そんなことを言うと、ワシは帰るぞ。

冬吉

あ、待って。あなたを竹馬の名人と見込んで、お願いがあります。私た

冬吉

ちに、竹馬の乗り方を教えてください。

冬吉

私が竹馬の名人だと？ 君にはなかなか人を見る目がある。実は私は、

冬吉

全日本竹馬選手権のチャンピオンなんだ。

冬吉

チャンピオンじゃなくて、チャンピオンですよ。

冬吉

そう、そのチャンピオンだ。早速、練習を始めよう。客席のみなさんも、

冬吉

一緒にやろうではないか。

冬吉

よし、竹馬に乗ってみたい人は、手を挙げて。

客席の子供たちが手を挙げるだろう。パパが、その中から何人かを選んで、ステージへ連れてくる。アキオ・春太郎・子供たちが竹馬の練習を開始する。

パパ

みんな

冬吉

みんな

パパ・冬吉

みんな

生まれたばかりの赤ちゃんは
何もできないつまりゼロ
みんなゼロから一つずつ
覚えて大人になるんだね
だから慌てることはない
ゆつくりゆつくり生きていこう

誰にもできないことはある
お箸が持てない子もいるよ
自転車乗れない子もいるよ
なんでもできる子はいない
だから慌てることはない
ゆつくりゆつくり生きていこう

何かをやろうと思っても
すぐにできない子もいるよ
エジソンだって勉強は
あんまり得意じゃなかったよ
だから慌てることはない
ゆつくりゆつくり生きていこう

子供たちが客席に戻る。

冬吉
アキオ

よし、練習はここまでだ。みんな、乗れるようになったかな？
（竹馬に乗って）ほら、見て。ちゃんと乗れるようになったよ。歩くこ
ともできるようになったよ。

パパ

偉いぞ、アキオ。さすがは私の息子だ。

冬吉

そういうおまえはどうなんだ。

パパ

（竹馬に乗って）見てください。歩くことはできませんが、乗れるよう
にはなりました。エッヘン。

冬吉

乗れただけでイバるんじゃない。ワシなんか、乗りながらラーメンが食
べられるぞ。

パパ

私だって、ラーメンは無理だけど、肉マンなら。

アキオ

春太郎は乗れるようになった？

冬吉

よし、春太郎。乗ってみろ。

春太郎が竹馬に乗る。が、すぐに倒れる。

アキオ

春太郎！（と駆け寄る）

冬吉

助けなくていい。

アキオ

でも……。

冬吉

春太郎、悔しいか。

春太郎

（うなづく）

冬吉

しかし、おまえは泣いてない。悔しくても、我慢できるようになったん
だ。おまえはそれだけ、進歩したんだ。

アキオ

パパ

アキオ

パパ

アキオ

パパ

アキオ

パパ

アキオ

パパ

パパ、今、何時？

(腕時計を見て) 6時15分前だ。

よし、そろそろ行かなくちゃ。

行くな、アキオ。決闘なんかして、怪我でもしたらどうする。

でも、僕が約束を破ったら……。

春太郎なら大丈夫だ。和也にいじめられても、もう泣いたりしない。

でも、僕には和也が許せない。ちよつと喧嘩が強いからって、あんなに

イバるなんて、まるで……。

まるで？

ちよつとサッカーがうまいからって、いい気になってた僕みたいじゃないか。

いか。

待ちなさい、アキオ！

アキオが走り去る。後を追って、パパも走り去る。

冬吉

春太郎

冬吉

(春太郎に) おまえはどうする。

僕も行く。

よし、それでこそ、男というものだ。

冬吉と春太郎が去る。

プリンさん・トンダはかせ・虫メガネ探偵団・トキジロウがやってくる。トンダはかせは背負っていたトキジロウを床に下ろす。

10

トンダはかせ

プリンさん

トンダはかせ

プリンさん、ここはどこですか？

人呼んで、魔法屋敷。

魔法屋敷？　するとここには、魔法つかいがいっぱい住んでるんですね？

鼻の垂れ下がった、鬼婆みたいなヤツらが。

あの、私も一応、魔法使いなんですけど。

そう言えば、そうでした。しかし、プリンさんの鼻は垂れ下がってませ

んね。整形手術でもしたんですか？

してません。魔法つかいにも、いろんな人がいるんですよ。私は月の魔

法つかい。人間を助ける、いい魔法つかいなんです。

じゃ、ここに住んでいる魔法つかいは？

私と同じ、月の魔法つかいです。

そうか。プリンさんは、その魔法つかいの力を借りて、元の世界へ帰る

つもりなんですかね？　しかし、私たちの話を信じてくれるかな。

私が話せば、わかってくれると思います。

頼みましたよ、プリンさん。

プリンさん

(奥へ向かって) ババロアさん！ ババロアさん！

奥から、ババロアさんがやってくる。プリンさんと同じぐらいの年だが、ちゃんと魔法つかいの恰好をして、手に木の太い杖を持っている。デイズニー映画に出てくる感じ。

ババロアさん

何よ？ 私になんか用事？

プリンさん

いきなりお邪魔して、ごめんなさい。私はプリンという者です。

ババロアさん

私、プリンは嫌い。プリンより、ババロアの方が好き。

トンドアはかせ

いや、私はプリンの方が好きだな。

プリンさん

トンドアはかせは黙ってて。(ババロアさんに) 実は私たち、ババロアさん

ババロアさん

んにお願いがあつてきたんです。

プリンさん

お願いって？

信じてもらえないかもしれないけど、私たちは30年後の世界から来たんです。私の魔法でも、こっちの世界へ来たなら、魔法が使えなくなつた。元の世界へ帰れなくなつたんです。お願いします、ババロアさん。あなたの魔法で、元の世界へ帰らせてください。

ババロアさん

バカバカしい。私がそんな嘘、信じると思つてるの？

トンドアはかせ

嘘だと思ふなら、証拠を見せよう。(ト Hancock を出して) これは、30

ババロアさん

年後の世界で人気がある、セーラーームーンの Hancock だ。

トンドアはかせ

それはわかつてる。私が問題にしてるのは、セーラーームーンなんだ。

ババロアさん

何がセーラーームーンだ。今、人気があるのは、鉄腕アトム Hancock だよ。(ト Hancock を出す)

トシダはかせ
ババロアさん

鉄腕アトムだった？ 懐かしいなあ。そのハンカチ、私のと交換してくれませんか？

イヤだよ。(プリンさんに) あんた、今、魔法つかいだって言ったね？
だったら、魔法を見せてごらん。見せてくれたら、あんたの話を信じてあげるよ。

プリンさん
ババロアさん

それは無理です。私はこの世界では、魔法が使えないんです。
ほら、やっぱり嘘なんじゃないか。さあ、とっとと出てっておくれ。私は嘘つきが大嫌いなんだ。

プリンさん
ババロアさん

信じてください、ババロアさん。
出ていけって言ったのが、聞こえなかったの？ さあ、早く。

――――
M13「ケンタロウ」

プリンさん

私が子供だった頃
子犬を一匹飼っていた
子犬の名前はケンタロウ
水浴びするのが大好きで
夏が来るたび川へ行き
一緒に泳いで遊んだ

ババロアさん
プリンさん
ババロアさん

どうして知ってるの？ 私が犬を飼ってたこと。
あなたのことなら、なんでも知ってるんです。
でも、会うのは今日が初めてなのに。

プリンさん

あなたは初めてかもしれないけど、私はずっと前から知ってました。あなたのことを。

ババロアさん

私が学校通う頃
大きくなったらケンタロウ
だけど一緒に川へ行く
時間はだんだんなくなった
庭でしょんぼりケンタロウ
遊び相手は窓の中

プリ・ババ

私が大人になった頃
ケンタロウはおじいさん
ある日庭の木の下で
動かなくなったケンタロウ
もう一度川へ行きたかった
一緒に泳いで遊びたかった

ババロアさん

ねえ、教えてよ。どうしてケンタロウのことを知ってるの？

プリンさん

ある人が、私に話してくれたんです。

ババロアさん

ある人って？

プリンさん

それはあなたです、ババロアさん。

ババロアさん

私？

プリンさん

そうです。あなたは今から5年後に結婚して、一人の女の子を産むんで

ババロアさん
プリンさん
ババロアさん
プリンさん
ババロアさん

す。そして、プリンという名前をつけるんです。あなたはそのプリンに向かって、ケンタロウの話をするんです。
ということとは、あんたは私の娘？
そうです。
バカバカしい。どうせ嘘をつくなら、もっとマシな嘘にしなよ。
嘘じゃない。私は本当にあなたの娘なんです。
帰ってよ。私の家から、とつとと出てつておくれ。

ババロアが奥へ去る。

トンダはかせ
プリンさん
トンダはかせ

驚きましたよ。あの人が、あなたのママさんだったなんて。
でも、ママは信じてくれなかった。
元の世界へ帰るには、あの人の力が必要なのに。一体どうすればいいんだ。

トキジロウ
トンダはかせ
トキジロウ

私がお話をします。

トキジロウ、まだエネルギーが残っていたのか？
動くことはできませんが、話ができます。ババロアさんは私に任せて、みなさんは小学校へ行ってください。アキオくんとパパさんを探して、ここへ連れてくるんです。

トンダはかせ

よし、わかった。虫メガネ探偵団の諸君。君たちはここに残って、トキジロウを助けてやってくれ。

虫メガネ探偵団
トンダはかせ

任せてください。
さあ、プリンさん、行きましょう。

プリンさん
トキジロウ、頑張っ
てね。

トキジロウと虫メガネ探偵団が奥へ去る。反対側へ、プリンさんとトンダはかせが去る。

アキオとパパがやってくる。

アキオ

あれ？ 誰もいないぞ。

パパ

(腕時計を見て)まだ6時になってないからだ。アキオ、今からでも遅くない。決闘なんかやめて、元の世界へ帰ろう。

アキオ

でも、トキジロウがいないよ。

パパ

そうか。トキジロウがいないと、時間旅行ができないんだ。一体どこへ行ったのかな？

アキオ

パパ、探してきてよ。

パパ

よし、わかった。(と歩き出すが、すぐに止まって)ダメだダメだダメだ。おまえ一人を残していくわけにはいかない。

お寺の鐘の音。

アキオ

何の音？

パパ

お寺の鐘の音だ。たった今、6時になったんだ。

そこへ、和也と他の生徒たちがやってくる。

和也

アキオ

和也

アキオ

パパ

アキオ

和也

パパ

和也

アキオ

パパ

アキオ

そこへ、プリンさんとトンダはかせがやってくる。

プリンさん

パパ

プリンさん

よく来たな、アキオ。

僕は約束を守ったんだ。だから、二度と春太郎をいじめんなよ。

それは、俺が負けたらの話だ。

ずるいぞ。さっきはそんなこと、言わなかったじゃないか。

(和也に) そうだ。君は「来なかったら、また春太郎を泣かす」って言ったんだ。「俺が負けたら」とは言わなかった。嘘をつくくと、針千本飲

ませるぞ。

パパは横から口出ししないで。

パパ? その人は、おまえのお父さんなのか?

そうだ。私はアキオの父親だ。

(アキオに) これは、男と男の決闘なんだぞ。お父さんを連れてくるなんて、ずるいじゃないか。

パパは勝手についてきたんだ。決闘するのは、僕だけだ。

やめなさい、アキオ。どうしてもやるって言うなら、この私を倒してか

らにしないさい。

アキオくん!

あ、プリンさん! あなたもこの世界へ来たんですか?

パパさんとアキオくんを連れ戻すために、後を追いかけてきたんです。

トンダはかせ
パパ
トンダはかせ

(パパに) そんなことより、この騒ぎはなんです。アキオがその子と決闘するって言うんです。決闘だって？ そいつはなかなかおもしろそうだな。一つ見物させてもらおう。

パパ
トンダはかせ

のんきなことを言って、トンダはかせも止めてくださいよ。いいじゃないか、決闘ぐらい。男の子なら、それぐらいの元気があった方がいいんだ。

パパ
プリンさん

他人の子供だと思って、無責任なことを言って。アキオくん、聞いて。今は決闘なんてしてる場合じゃないの。私と一緒に、魔法屋敷へ来てほしいのよ。

アキオ
プリンさん

どこへでも行くよ。決闘が終わってから。終わってからじゃ遅いのよ。(とアキオの手をつかむ)

和也
アキオ

逃げるのか、アキオ？ (プリンさんの手を振り払って) 僕は逃げない。逃げるもんか。よし、決闘開始だ。

他の生徒たち

頑張り、和也！

アキオと和也が歩み寄る。中央で向かい合って、構える。そこへ、夏子とタケダ先生がやってくる。

タケダ先生
パパ
タケダ先生

やめなさい、和也。あ、タケダ先生。いい所へ来ていただきました。和也。おまえってヤツは、どうして弱い者いじめばっかりするんだ。

和也

タケダ先生

夏子と他の生徒たちが去る。

(夏子に) おまえが言いつけたんだな？

文句があるなら、私に言え。さあ、一緒に職員室に来るんだ。

俺が何をしたって言うんですか？

とぼけるな。今、その子をいじめようとしてじゃないか。

それは、先生の勘違いですよ。僕は決闘しようとしてたんです。

決闘だと？

1対1で戦って、どっちが強いか決めるんです。

なんだ、そうだったのか。だったら、私も止めはしない。さあ、男らしく戦いなさい。

先生、あなたは二人に喧嘩しろって言うんですか？

誰がそんなことを言いました。1対1で戦うなら、喧嘩よりもっといい

方法がある。サッカーだ。

サッカー？

一人がキーパーをやって、もう一人がシュートをする。3回シュートを

して、2本入ったらシュートした方の勝ち。2本止めたらキーパーの勝

ちだ。いいな、和也？

(うなづく)

そっちの君もいいね？

(うなづく)

(夏子に) よし、君はボールを持ってきてくれ。

———M14「強くなりたい」

タケダ先生

喧嘩で負けたその次の日から

僕は腕立て伏せを始めた

あいつに仕返しするためじゃない

泣いてしまった自分のためさ

強い強い男になりたい

喧嘩で負けても泣かない男に

強い強い男になれたら

へびもオバケも怖くない

男たち

夏子がボールを持ってくる。タケダ先生に渡す。

タケダ先生

(アキオと和也に) よし、ジャンケンをしろ。

アキオと和也がジャンケンをする。アキオが勝つ。

タケダ先生

(アキオに) キーパーにするか？ それともシュートする方か？

アキオ

キーパーにする。

タケダ先生

じゃ、和也はシュートする方だ。(と和也にボールを渡して) よし、二人とも位置に着け。

アキオがゴールの前に立つ。和也がその真正面に立つ。タケダ先生が二人の間に立つ。

プリンさん

プリン・夏子

意地悪ばっかりする男の子に
やめなさいって注意をしたら
大事な筆箱 取り上げられた
悔しくて悔しくて 涙あふれた
強い強い女になりたい
意地悪されても泣かない女に
強い強い女になれたら
みんなを仲良くさせるんだ

パパがアキオに歩み寄る。

パパ

アキオ

パパ

アキオ

パパ

アキオ

パパ

アキオ

パパ

アキオ、頑張るんだぞ。絶対に油断するんじゃないぞ。
大丈夫だよ、パパ。僕があんなヤツに負けるわけない。
確かに、おまえはサッカーがうまい。しかし、おまえが勝つ確率は、お
そらく1パーセント。
パパは、僕が負けるって言うの？
あの子は、おまえよりサッカーがうまいんだ。なぜなら、あの子は大人
になって、おまえのチームの監督になるんだから。
それじゃ、あいつは30年前のミウラ監督なの？
(うなずく)

タケダ先生が一回目のホイッスルを吹く。和也がボールを蹴る。アキオが取るうとする
が取れない。シュートが決まる。アキオがボールを和也に投げ返す。和也がボールを足

元に置く。タケダ先生が二回目のホイッスルを吹く。和也がボールを蹴る。アキオが必
死でボールに跳びつく。アキオがボールを和也に投げ返す。和也がボールを足元に置く。
タケダ先生が三回目のホイッスルを吹く。

そこへ、春太郎と冬吉がやってくる。

春太郎

タケダ先生

冬吉

タケダ先生

冬吉

タケダ先生

冬吉

アキオ

和也

アキオ

和也

タケダ先生

アキオ！

シー！ 静かに！

なんだなんだ、一体何をしておるんだ。

お父さんも静かにしてください。次が最後のシュートなんです。

なるほど。決闘と言うから、喧嘩でもしておるのかと思ったら、シュツ

カーですか。

シュツカーじゃなくて、サッカーですよ。

そう、そのシュツカーです。こいつはなかなかいいアイデアですな。喧

嘩なんぞより、よっぽど健康的だ。

見てろよ、春太郎。必ず、止めてみせるからな。

止められるもんなら、止めてみる。

僕が止めたら、二度と春太郎をいじめらんじやないぞ。

それは、止めたらの話だ。

さあ、和也。シュートしなさい。

和也がボールを蹴る。アキオが取ろうとするが取れない。シュートが決まる。和也と他

の生徒たちが喜ぶ。アキオは地面に倒れまま。そのアキオに、春太郎が歩み寄る。

春太郎

アキオ

プリンさん

アキオ

トンダはかせ

パパ

冬吉

春太郎

アキオ。

ゴメンよ、春太郎。僕は勝てなかった。

でも、よく頑張ったわ。

そんなことないよ。僕はやっぱりいい気になってたんだ。ちよつとサツ

カーがうまいからって。

しかし、今は違う。春太郎くんのために、必死で戦ったじゃないか。

なかなか男らしくったぞ、アキオ。

春太郎、おまえもよく見習うんだぞ。

(うなづく)

和也が春太郎に歩み寄る

春太郎

和也

春太郎

和也、今度は僕と決闘しよう。

俺がおまえと？

僕が勝ったら、僕をいじめるのはやめる。他の子をいじめるのもやめる

んだ。

おまえが俺に勝てると思ってるのか？ 竹馬にも乗れないくせに。

春太郎

和也

春太郎が竹馬に乗る。

アキオ
冬吉

春太郎、すごいじゃないか。
さすがはワシの息子だ。しかし、ワシにはまだかなわんな。

冬吉が竹馬に乗り、春太郎の周りを回る。

和也
タケダ先生

(春太郎に) おまえ、いつの間に乗れるようになったんだ？
授業が終わってから、ずっと練習してたんだろう。春太郎、よく頑張ったな。

冬吉

(アキオを示して) その子のおかげですよ。その子が励ましてくれたから、頑張れたんです。

タケダ先生
和也
タケダ先生

どうする、和也。また決闘をするか？
もういいよ。決闘なんかより、サッカーをやろう。
そうだな。せっかくボールがあるんだから、みんなでサッカーをやろうじゃないか。

春太郎

(和也に) 僕も一緒にやっついでいいの？
いいよ。竹馬に乗れるなら、サッカーだってできるだろう？

冬吉

よし、ワシもやるぞ。実は私は、全日本シヨツカー選手権のチャンピオンなんだ。

タケダ先生

チャンピオンじゃなくて、チャンピオンです。

トンドはかせ

(パパに) どうです、パパさん、私たちも一緒にやりませんか。

プリンさん

いいですね。じゃ、プリンさんも一緒に。

パパ

ダメですよ、パパさん。私たちは、元の世界へ帰らないと。

パパ

プリンさん さあ、アキオくん。私と魔法屋敷へ行こう。

そこへ、虫メガネ探偵団とトキジロウがやってくる。

虫メガネ探偵団 トンダはかせ！

トンダはかせ トキジロウ！ 動けるようになったのか？

トキジロウ ババロアさんがエネルギーを出してくれたんです。魔法を使って。

そこへ、ババロアさんがやってくる。

プリンさん ママ！

ババロアさん その呼び方はやめな。私はあんたの話信じたわけじゃないんだから。

トンダはかせ じゃ、どうしてトキジロウを助けてくれたんですか？

ババロアさん 私は月の魔法つかいなんだ。困ってる人を見たら、助けないわけにはい

かないんだよ。

トンダはかせ でも、トキジロウは人じゃない。ロボットですよ。

ババロアさん 細かいこと言うんじゃないよ。(プリンさんに) さっさと元の世界へ帰

りな。ここにいと、どんどん年を取っちゃうんだろう？

プリンさん わかりました。トキジロウ、出発よ。

トキジロウ さあ、みなさん、私につかまってください。

パパ・アキオ・トンダはかせ・虫メガネ探偵団がトキジロウにつかまる。プリンさんがつかまろうとすると、ババロアさんがその手をつかむ。

ババロアさん
プリンさん
ババロアさん

あんたは自分の魔法で帰りな。
でも、私には魔法が使えないんです。

それはさつき聞いたよ。元の世界にいる時の、365倍のエネルギーが必要なんだろう？ だったら、客席のみなさんの力を借りればいいじゃないか。

プリンさん

そうか。みなさん、私に力を貸してくれますか？ 私と一緒に、歌を歌ってくれますか？

客席の子供たちは返事をするだろう。

プリンさん
ババロアさん

ありがとう。(ババロアさんに) みなさん、歌ってくれるそうです。

よかったじゃないか。それで、魔法を使えるようになったら、今度こそあんたを信じるよ。

トンドはかせ

よし、みんな。大きな声で歌おうじゃないか。

—————
M 15 「ムーンライト・マジック ③」

みんな

お願い月の光よ 私の声聞いてよ
道に迷った旅人に 道を教えるその光で

私の悲しみ消して 明日またきつと
いい日が来ると 信じていたから
ルーナルーナルー

遠くに、白くて大きな満月が見える。

アキオ

さよなら、春太郎。

春太郎

さよなら、アキオ。

パパ

さよなら、お父さん。

冬吉

ワシは君のお父さんではない。

パパ

わかってますよ。でも、あなたに会えて、本当によかった。さよなら、タケダ先生。さよなら、和也。さよなら、同級生みんな。さよなら、

夏子ちゃん。

さよなら。

アキオ

(パパに) ちょっと待って。あの子、夏子ちゃんて言うの？

パパ

そうだ。あの子は、 ∞ 年前のママなんだよ。

アキオ

さよなら、みんな。 ∞ 年経ったら、また会おうね。

みんな

さよなら。

みんな

お願い月の光よ 私の声を聞いてよ

家をなくした子犬に ほほえみかけるその光で

私の淋しさ消して いつかまた

あの人に会えると 信じていたいから

ルーナルーナルー

月の光がプリンさんを包む。

プリンさん
バロアさん

さよなら、
ママ。
さよなら、
プリン。

と、閃光が走る。

————— M 16 「サッカーボールと僕らの夢②」（演奏のみ）

たくさんのチアガールがやってくる。手にボンボンを持って、選手たちの応援をする。そこへ、アキオとパパがやってくる。反対側から、プリンさんがやってくる。

プリンさん

アキオくん。

アキオ

おはよう、プリンさん。

パパ

（プリンさんに）先週の日曜は、いろいろとお世話になりました。

プリンさん

私は何もしてません。でも、無事に帰ってこられてよかったですね。

アキオ

ママには怒られたけどね。

パパ

（プリンさんに）私も怒られました。でも、「30年前のママはかわいかったよ」って言ったたら、「30年前のパパだって、カッコよかったわよ」

プリンさん

はいはい、ごちそうさま。アキオくん、今日の試合はどうするの？

アキオ

ベンチで応援するよ。

プリンさん

じゃ、チームはやめないのね？

アキオ

やめない。たとえ試合に出られなくても、僕はサッカーが好きなんだから。

パパ
アキオ
パパ
プリンさん

一度やるって決めたら、最後まで諦めない。それが――
それが男というものさ、でしよう？
その通り。
あら、それは女だって同じよ。

そこへ、ミウラ監督と選手たちがやってくる。

アキオ
選手たち
アキオ
ミウラ監督

あ、みんな、おはよう。
おはよう、アキオ。
（ミウラ監督に歩み寄って）監督、おはようございます。
ああ、おはよう。アキオがこんなに早く来るとは、珍しいな。いつもは必ず遅れて来るのに。しかし、いくら早く来たって、試合には出さないぞ。今日はベンチで応援だ。

アキオ
ミウラ監督
アキオ
ミウラ監督
アキオ
ミウラ監督
ミウラ監督
アキオ
ミウラ監督
ミウラ監督
ミウラ監督

わかってます。
どうやら、先週の試合のことは、しっかり反省できたようだな。
はい。僕はやっぱり自分勝手でした。自分のことしか考えてませんでした。だから、今日はみんなのために一生懸命応援します。
先週とは別人のようだな。もしかして、お父さんに怒られたのか？おまえのお父さんは、昔から厳しい人だからな。
でも、監督はパパをいじめてたんでしよう？
（パパに）なんだ、ハルタロウ。おまえ、話したのか？
すまん。
まあ、仕方ない。本当のことだからな。小学生の頃の私は、他人の気持

プリンさん
ミウラ監督

ちを全く考えない子供だった。しかし、私は反省したんだ。ハルタロウと、もう一人の男の子に出会ったおかげで。

もう一人の男の子って？
それが、よく覚えてないんです。何しろ、一回しか会ってないから。その言えば、ちよつとアキオに似てるような気もするな。どうだ、ハルタロウ？

パパ
ミウラ監督

それは気のせいだろう。
とにかく、私はあの時、気づいたんだ。いくら喧嘩が強くても、それは本当の強さじゃないって。

パパ

私も気づいた。本当の強さっていうのは、どれだけ他の人の気持ちが悪えられるかってことなんだ。そして、その人のために、どれだけ頑張れるかってことなんだ。
そうか。本当の強さっていうのは、心の強さなんですな。

プリンさん

――――
M 17 「強くなりたい②」

パパ・ミウラ

喧嘩で負けたその次の日から
僕は腕立て伏せを始めた

あいつに仕返しするためじゃない
泣いてしまった自分のためさ

みんな

強い強い男になりたい
喧嘩で負けても泣かない男に
強い強い男になれば

へビもオバケも怖くない

そこへ、ママ・おじいちゃん・トンダはかせ・虫メガネ探偵団・トキジロウがやってくる。

ママ
よかった、間に合った。

トンダはかせ
(ミウラ監督に) 試合はまだ始まってないですよね？

ミウラ監督
いや、もうすぐ始まります。さあ、みんな。今日も張り切っていこう。

おじいちゃん
アキオも張り切って応援するんだぞ。

アキオ
うん。

アキオ・ミウラ監督・選手たちが去る。

プリン・ママ
意地悪ばかりする男の子に

やめなさいって注意をしたら

大事な筆箱取り上げられた

悔しくて悔しくて 涙あふれた

強い強い女になりたい

意地悪されても泣かない女に

強い強い女になれたら

みんなを仲良くさせるんだ

おじいちゃん
トンダはかせ

よし、ワシらも応援に行くか。
そうしよう、そうしよう。

おじいちゃん
ママ
虫メガネ探偵団
トキジロウ

おまえは家に帰って、おかしな機械でも作っておれ。
そんなこと言わないで、みんなと一緒に応援しようよ。
トキジロウも行くこう。
(うなずく)

ママ・おじいちゃん・トンダはかせ・虫メガネ探偵団・トキジロウが去る。

プリン・パパ

自分のためならどんな人でも
頑張ることはできるだろうけど
大切なのは自分以外の
誰かのために頑張ること
強い強い人になりたい
みんなの気持ちがわかる人に
強い強い人になれるまで
諦めないで生きていこう

パパが去る。

トンガリぼうしの魔法つかいたちがやってくる。

—————M18「トンガリぼうしの魔法つかい」

魔法つかいたち

白い月が昇ったら

窓を開けて 夜空を見上げて

ほら トンガリぼうしが通り過ぎる

悲しい寝顔の女の子には

そっと笑顔の魔法をかける

私は月の魔法つかい

トンガリぼうしの魔法つかい

プリンさん

これで、今日のお話はおしまい。アキオくんはあの後、どうなったかって？ もちろん、また試合に出られるようになりました。チームは次の試合も、そのまた次の試合も勝って、とうとう優勝しちゃったの。20年前の世界へ行って、私はいろんな人に出会いました。若い頃のママにも、そして、わかったのは、本当の強さってどういうのは、心の強さなんだってこと。だから、喧嘩の弱い人だって、私みたいな女の子だって、努力す

魔法つかいたち

れば強くなれるのよ。私も強くなりたから、まずは他の人の気持ちを考えよう。そして、その人のために頑張ろう。今の私は、そんなふうに思っています。それではみなさん、さようなら。また会える日を楽しみに待っています。

青い屋根を飛び越えて
忘れた夢 届けに行こう
さあ トンガリぼうしが舞い降りる
ひとりぼっちの男の子には
楽しいお話 聞かせてあげる
私は月の魔法つかい
トンガリぼうしの魔法つかい

魔法つかいたちが去る。あたりが次第に明るくなっていく。夜明けの時間だ。それでも、月は白く輝いたままだ。